

エッセイ 中東奮闘記－湾岸50年、オイルマンの軌跡

第十三回 引き続くオマーンとの新しい交流

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

13-1. オマーン講演行脚 - 3つの大学で日本について語る

2005年2月に、オマーン国内の恒例行事としてのみならず海外からの観光客誘致も大きな目的である「マスカット国際フェスティバル2005」の一環として、マスカット市が「Towards new Arab situation (新しいアラブ情勢に向けて)」というセミナーを3日間にわたって開催し、その講師として国内外の有識者や著名人を招待した。

前年現地で行ったオマーン日本友好協会設立30周年記念講演の出来栄えからか、在オマーン日本大使館の推薦で、私がこのセミナーに招待されることになった。演題は、「日本経済の発展」とした。

アラビア半島で「日本経済の発展」という演題で「戦後の日本の経済復興と高度成長」を語る日本人学者が多い。私の考えは違っていた。アラビア半島の近代化が始まったのは1970年代から、日本の近代化が始まったのは明治維新からのことである。さすれば、当時のアラビア半島は明治30年代に当たる。従って、アラビア半島向けには、「明治以来の日本経済の発展を話す方が役に立つ」と私は考えていた。

従って、カバーする範囲を戦後からではなく明治以降とした。日本経済発展の歴史や発展の要因について述べ、オマーン経済の発展への私の評価・提案などをつけ加えた。

当日、海外からの講演者の顔ぶれをみて驚いた。アラブ諸国から各国を代表する学者や著名人たちが参加していた。それに比べれば市井の一介の老人に過ぎない私は大いに緊張したが、無事この講演をやり終えた。

因みに、待遇は、エミレーツ航空のファースト・クラス、一流ホテルでの宿泊が用意され、今度は講演料までもいただいた。

1998年にUAE大学で、男子学生、女子学生、教授向けと3回の講演を行ったことがある私は、かねてからオマーンの大学生にも私の話を聞いて貰いたいと願っていた。前年のオマーン日本友好協会設立30周年記念講演会の時にも講演終了後に、スルタン・カブース大学学長代理に「航空運賃は自分持ちでもよい。貴大学で学生向けに話をさせていただけませんか」と厚かましく申し出ていた。

UAE大学でアラブ学生の「日本」に対する知識の乏しさを痛感していたからであった。その時に、同学長代理からは、「検討してみる」との返事をいただいていた。

念願のオマーンの大学での講演会が、この時の訪問時に実現することになった。これには、たまたま同行していた森谷和夫モリヤ産業社長兼OCIPED（オマーン投資促進・輸出振興センター）日本代表にも参加してもらい、2人3脚での講演旅行となった。

マスカット国際フェスティバルの講演に次いでマスカットでオマーン歴史協会と日本大使館共催の講演会を終えた後に、私はソハール大学、ブライミー大学、スルタン・カブース大学の3大学を順次訪れた。

ソハール大学とブライミー大学では、聴衆が教職員、土地の名士、ビジネスマンが多かった。1998年のUAE大学以来のアラブの大学での講演で、現地学生との交流を楽しみにしていた私には残念であったが、演題を急遽「日本」から「日本経済の発展」に変えて対応した。

当時のブライミー行政区長官を務めていたのは、私がエクセター大学在籍中に同大で博士号を取った旧知のカリファ。講演会の前に「講演会には出席する。会うのが楽しみ」と言ってきたが、前日になって、「カブース国王がミート・ザ・ピープルの巡幸でブライミーに入ってこられたので、講演会には出席できない」という連絡が入り、「国王が来られているのなら仕方がないな」と思った記憶がある。やはり、聴衆が教職員、土地の名士、ビジネスマンが多かったので、演題は「日本経済の発展」とした。

その後にニズワ大学にも行く予定であったが、同行したオマーン人のムハンマド博士の急病で取り止め、そのままマスカットに戻り、その後スルタン・カブース大で講演をした。ここでは学生が聴衆の主体だったので、演題を「日本」とした。

男子と女子の校舎がまったく別々に建つUAE大学とは違って、男女学生が講演会場である同じ階段教室に着席していたのが印象的であった。男女同室での着席であったが、男子は男子、女子は女子で固まっていた、ミックスまではしていなかった。

当時オマーンには13の大学が開校していた。1886年に開校した「オマーンの東大」ともいえるスルタン・カブース大を含めて13の大学が開校していたが、人口270万人に対しては、相当の数であった。日本は当時1億2500万人の人口で大学の数が約700校。オマーンの大学数は、人口当たりで日本にも匹敵するほどの数であった。

当時ソハール大やブライミー大の教職員の中で、イラク人学者たちが目立って多かった。2003年のイラク戦争後の混乱で母国を逃れて大学の新設が相次ぐオマーンで教鞭をとっていたのだろう。湾岸地域の大学では、どこも同じ状況だろうと推測された。これらの学者たちは、日本経済の発展よりも日本が戦後の混乱からどう立ち直ったかについての関心が強く、講演後も苦渋に満ちた顔でこれに関する質問がもっぱらであった。

この講演旅行の際のイラク人学者たちとの交流を通じて感じたことは、イラク問題で日本の自衛隊の活動を評価する声があり、「日本が自衛隊を派遣すると中東でせつかく築いた日本のよい評判が落ちる」というのは間違いだということに加えて、「アラブをイスラームと部族だけで解説する」人々の愚であったことが理解できた。アラブの人も同じ人間、戦争の苦境の中を生きながらえながら、国を憂い、家族を思っていた。

13-2. 発展するドバイ - 「世界一」が集まる街

オマーンでの講演会の機会を利用して、私はオマーンからの帰路前述の森谷とドバイで1泊することにした。ドバイには2002年暮れにも2泊し、その後もトランジットでは訪れていたが、「ドバイはすごい！」と聞いていた発展ぶりを自分の眼で確かめたいと思ったのだった。また、イギリスの大学で一緒だったドバイの友人に会う目的もあった。

マスカットからドバイ行きの飛行機に乗り込んで指定されたファースト・クラス席に行くと、窓際の席に現地の若い女性が座っていた。いくら指定席とはいえ、現地女性の隣に座ってよいものかと近くにいたCAに訊ねると、「どうぞ」という。そこで、「この席に座ってよいですか」とくだんの女性に訊ねると、「どうぞ」という返事。きれいな英語だった。

座ってからCAに新聞を頼むと、彼女が「私は貴方を知っています。新聞に載っていた方でしょう」と言って新聞を渡してくれた。なるほど、貰った英字新聞を開くと、前日のスルタン・カブース大学での講演の記事が私の写真入りで大きく載っていた。

隣席の女性が「貴方はどうしてオマーンに来たのですか」というので、「このためです」と言って私が載っている新聞を渡した。その記事を見るや、「私の父と兄の写真も載っているわ」と言って新聞を返してきた。見ると、その記事は私の記事の真下。オマーンで有名な財閥の当主とその息子の写真であった。「えっ、貴方はあの財閥のお嬢さん？オマーンNo.1の財閥の？」と訊ねると、「そうです」という。「こんなに若くても、ファーストクラスに乗るのは当たり前だ」と納得した。

話してみると、彼女は2児の母。ドバイにいる妹さんを訪ねるところだという。大学でメディア論を勉強しメディアの世界に飛び込みたいと思ったが父親の反対に遭い、スルタン・カブース大学の事務局に勤務しているとのことであった。そこには、事務総長や何人かの教授に私の知己がいたので、共通の話題で話は大いに盛り上がった。

「オマーンでの私の講演も今回で終わりでしょう。もう私も年です。ご覧の通り老人だし」というと、彼女は真剣な顔で、「年などを考えてはだめ！人間は死ぬまで勉強です！」とハッパをかけてきた。女性には従うのが、私の流儀。しかも相手は、育ちも良い若いアラブ美人。これからは年齢を意識せずにアラブとの交流を続けようと改めて心に誓った。

ドバイで会うことになっていた私のエクセター大学時代の友人は、ドバイを代表する財閥の御曹司だったが、家業は継がずに、イギリスで得た法学博士号の資格を生かして当時ドバイ首長府の法律顧問を務めていた。

夜8時に宿泊先のグランド・ハイアット・ドバイのロビーに現れた彼から、「ショッピングと食事はどこがいいか。モダンなところ、それとも伝統的なアラブのスーク（市場）がいいか」と訊かれて「後者が良いね」と答えて、案内されたのがジュメイラ地区にある「ス

ーク・マディナ・ジュメイラ」であった。

その夜は当時木曜日と金曜日が休日であったアラビア半島では、週初めに当たる土曜日の夜であったが（現在ドバイは土・日が休日になっている）、建物前の広場も入口付近もたいへんな人出であった。車を停めるのも一苦労、建物の中も歩くのもままならないほど大勢の人で賑わっていた。巨大なスークだから、到底全部は廻りきれない。一部の店を覗いた後で、同じくエクセター大学で一緒に当時UAE大学の教授をしていたアブダビ人の友人も加わっての食事となった。教授とは、2000年5月にUAE大学で会って以来の再会であった。

そのレストランは屋内にも席があったが、われわれが陣取ったのは屋外のテーブル。人工の運河沿いにあった。目の前は、建物の夜の明かりに照らされた水路。その水面を外国人観光客を乗せたアブラ（アラビアで使われる水上タクシー）が、音も立てずにゆっくりと行き来をしていた。右前方には、ドバイを代表する高さ321メートルを誇る7つ星ホテル、ブルジュ・アルアラブを仰ぎ見ることができた。煌々たる電気を灯して、暗闇の中に浮かび上がっていた。なんと幽玄でロマンチックなことか。これはゴンドラが行き交うベニス夜の風景にも匹敵する。

私が日本からオマーンに行くのに搭乗したのは、それまでに300もの国際的な賞を受賞して世界的に人気のエミレーツ航空。関西空港からは毎日飛んでいた。

機内で日本人CAから、「いまドバイには250人を超えるエミレーツ航空の日本人CAが住んでいます。もっと増えますよ」と聞いて驚き、その2人に「ドバイと東京とどっちがいい？」と訊ねたら、2人とも「それはドバイです」という答えが返ってきていた。「スーク・マディナ・ジュメイラ」での食事はそれを十分に納得させるものだった。心地よいドバイの夜であった。

「スーク・マディナ・ジュメイラ」からホテルへの帰り道、友人があちらこちらを案内してくれた。驚いたのは、建築中の高層ビル群。電気を煌々と照らしての24時間突貫工事中だと聞く。しばらく走ると、マイクロソフトなどの情報技術系企業約600社が入るインターネット・シティ、CNNやロイター通信などのマスコミ系企業約850社が入るメディア・シティ、それにインド系大学など8大学が入るビルなどが道の右手に広がってきた。

「われわれドバイに住んでいる者でも、1週間で街の景色が変わるのに驚いている。発展が広範囲に亘り、またそのスピードが早いので、法律を作るのが追いつかない状態だ。新婚の私も毎日家に仕事を持ち帰らなければならない。まだ新婚旅行にも行けないでいる」と友人は話してくれた。

それからすぐに、ネオンで光り輝く建物が立ち並ぶ通りに出る。ラスベガスと見まがうばかりのきらびやかさである。これがイスラームの国の風景とは到底思えないものであった。

ドバイには、まだまだ目を見張るようなプロジェクトが目白押しであった。前年の9月

には、世界一を誇る高さ800メートル超の超高層ビルの建設も始まっていた。かのベッカム選手もヴィラを購入したといわれる椰子の木をイメージした世界最大の2つの人口の島「ザ・パーム」や世界地図を模したリゾートの島「ザ・ワールド」もやがて完成し、その先には都市鉄道である「ドバイ・メトロ」の建設も計画されていた。

すでに「ショッピング・スポット」、「世界的なゴルフ場」として、また「競馬のドバイ・ワールドカップ」で有名となっていたドバイは、世界的なリゾートとして、また技術と情報の中心地としてさらに進化しようとしていた。

私がドバイを初めて訪れたのは、1975年のことであった。アブダビから車で入ったが、アブダビの街を外れればすぐに砂漠、ドバイへは左右一面の砂漠の中に舗装された道路が一本あるだけだった。砂丘を登り、砂丘を下る道路が、どこまでもどこまでも伸びていた。1960年代には、その道路さえもなかった。1968年にアブダビに赴任した丸善石油の後輩から、アブダビからドバイ間の砂漠の真ただ中で車がスタックして、死ぬ思いをしたと聞いたことがある。

この地域に道路といえるものができたのは1971年で、ドバイ・ラスアルハイマ間に単線のタールマカダム舗装道路（骨材にタールを染み込ませて固めた舗装道路）が最初である。当時、アブダビ・ドバイ間に道路はなく、四輪駆動車、トラック、それに何台もないタクシーなどが海岸の砂浜を走って二つの町をつないでいた。アブダビとドバイが、舗装道路建設を各々国境までの費用を分担して1971年に開始し、1973年に完成させている。

1970年代後半には、この道路の両側の砂漠にはまだラクダが草をついばんでいた。私が夜間ドバイからアブダビに車を運転して帰る時に一番怖れていたのが、ラクダとの衝突であった。相手は大きいものは、体重が700キロ近くある。衝突して車に乗りかかられては、ラクダもあの世行きだが、こちらもある世行きとなる。私は必死に目を凝らして前方を見ながら運転したものだ。

そういえば、昼の運転時によく見たのは、道の左右に点在するラクダの干物であった。車に衝突してご昇天したラクダが砂漠をまぶしく照らす太陽で水分が飛ばされ、ラクダは骨と皮だけになる。当時あちらこちらに見られる光景であった。

その光景と比べると。いまはなんという変わりようであろうか。アブダビからドバイまでの130キロの道路の左右には木が生い茂り、砂漠はまったく見えない。黙っていれば、東南アジアのマレーシアやインドネシアと見まがう景色である。

1970年代の初頭、UAEの人口は約20万人、ドバイの人口は6万程度であったが、私が訪れたこの頃はそれぞれ、450万と110万に膨れ上がっていた。

ドバイは、11世紀末ごろのアラブ人地理学者の地理書に初めて言及されたと仄聞している。16世紀末にこの地を訪れたベネチアの真珠商人が、「住民たちは漁業、真珠採り、造船を生業としていた。金、香辛料、織物商人への宿泊施設を提供していた」と記録し、18世紀初頭には「ドバイが城郭都市であった」との記録があるとも聞く。

アブダビを中心に勢力を誇っていたバニ・ヤス支族のアル・ブ・ファラサ族900人が家長シェイク・マクトゥーム・ビン・ブティに率いられて1833年にアブダビからドバイに移住して独立を宣言したのが現在のドバイの始まりである。

19世紀後半当時、ヒトとモノの移動の中心であったイラン側のリング港を掌握していたカシミ族が、1887年にその支配権を握ったペルシャによって追い出された。彼らが行き着いたのが、彼らを積極的に受け入れたドバイであった。ドバイ第四代ラシッド首長、第五代マクトゥーム首長のころのことであった。その結果、カシミ族のノウハウによってドバイが栄えることになった。

1930年代にドバイは真珠の輸出で有名になり、また欧米や日本からの綿製品や工業製品が流入するようになった。19世紀後半に4000人であった人口は、18000人に増えた。

貿易や商業を盛んに行ってきた代々の首長のDNAを引き継ぎ、今日のドバイの発展の基を築いたのは、「ドバイの父」とよばれる第八代首長のラーシッド・ビン・サイード・アル・マクトゥームである。1939年から1958年までの皇太子としての20年間、さらに1958年から死去する1990年までの32年間は首長として、実質的な意志決定者の地位にあった。

即位後に第一に手掛けたのが、港湾と空港の建設である。1960年にはドバイ・クリーク、1965年にはドバイ空港、1972年にはラシッド港が完成している。

1966年にドバイで油田が発見されて、産出量は多くはなかったが、1973年の第一次石油危機と1979年の第二次石油危機の際には、莫大な収入をえた。しかし、ラーシッドは、石油の枯渇を見越して「脱石油」の路線を打ち出した。

1979年には、スーパータンカー用のドックが完成し、次に目指したのが、ジュベル・アリ港の建設と中東初の試みである経済特区ジュベル・アリ・フリーゾーンの建設であった。前者の第一フェーズは1983年に完成し、後者は1985年に完成した。

私は、1977年から1979年の2年間アブダビに駐在していたが、ドックの計画を聞き、「そんなものを作ってどうするのか。ドバイでドックに入る船などあるのだろうか」と訝っていたが、事実は大いに異なった。1980年から1988年のイラン・イラク戦争で、イラク軍とイラン軍による攻撃により破壊されるタンカーが300隻にも及び、このドックは大いに賑わった。

ドバイは、海の交易のハブとなったジュベル・アリ港に加えて、空の交易のハブとなることを目指した。当時、UAEの中心は首都のあるアブダビであり、主な国際空路はアブダビ国際空港が独占していた。これに対してドバイは、自前の航空会社として1985年にエミレーツ航空を誕生させた。最初は、パキスタン航空からリースした2機だけでスタートしたと聞く。私が訪れた2005年当時、所有機数は280機、140以上の都市とを結ぶまでに成長していた。

湾岸地域は、アジアとヨーロッパ、アフリカをつなぐ要衝の地に位置している。考えて

みればこの地の利を生かし、海と空でヒトとモノの移動のハブとなるのは当たり前のことであるが、これを見抜いていたラーシッド首長の慧眼には舌を巻く以外にない。

1988年には、湾岸初の緑のゴルフ場であるエミレーツ・ゴルフ・クラブが開業した。それまでは砂のゴルフ場しかなかった湾岸に緑のゴルフ場は奇跡ともいえるものであった。

海のインフラ、空のインフラ整備に着手したラーシッド首長は1990年に亡くなり、後を継いだ長男のマクトゥム首長は比較的短命だったが、この期間に勃発した湾岸戦争時にCNNがドバイに本拠地を置き、その状況を「ドバイからお伝えしました」と報道することでドバイの知名度は上がり、ドバイの安全性が世界に周知されることとなった。1995年に後を継いだ三男の第10代のムハンマド首長が即位してから、ドバイはさらに目覚ましい発展を遂げた。

同首長は石油依存脱却路線を引き継ぎ、トップダウンでこれらのインフラの一層の拡充を図るとともに、海外からの投資を大胆に呼び込み、ドバイ・インターネット・シティ、ドバイ・メディア・シティ、ドバイ・ナレッジ・シティ、ドバイ・ヘルスケア・シティ、ドバイ国際金融センターなどのフリーゾーン建設などのプロジェクトを進めた。彼は「世界一」作戦をとった。様々な分野で「世界一」のものを生み出し、人をエキサイトさせる仕掛けを作るのを目指したのである。

1999年の豪華な七つ星のブルジュ・アル・アラブホテル、2005年にはドバイのショッピングモール「モール・オブ・ザ・エミレーツ」に世界最大の屋内スキー場もできた。さらに、海洋リゾート地であるパームアイランドとその中心にあるアトランティス・ザ・パームホテル、世界最大の商業施設であるドバイ・モール、世界最大のドバイ・ファウンテン、828メートルの世界最高の高さを誇るブルジュ・ハリファ、世界最長の無人軌道であるドバイ・メトロも彼が仕掛けたものである。

2001年の同時多発テロでサウジアラビアやUAEなどに疑惑の目が向けられ、中東産油国が余剰石油資金をロンドンやニューヨークから引き上げ、ドバイでの資金運用に向けられたのもドバイにとっては幸運なことであった。

私は、マスカットからドバイへの飛行機のファーストクラスの席でオマーンの財閥の令嬢と乗り合わせたことは既述したが、この時に旧知のオマーンの実業家とも偶然に乗り合わせた。私が機内の頭上の荷物置き場に荷物を上げようとしていたら、「エンドーさん、久しぶり」という声とともに手が伸びてきて、荷物を入れるのを手伝ってくれた。振り向くと、私がかつて働いていたオマーン商工省の元次官のハミースだった。彼は訳があつて職を辞して実業家に転身をして当時ドバイで不動産の売買をしていたが、「エンドーさん、ドバイでは午前中にビルを一棟まるまる買って、午後で転売する。それだけで莫大な利益が入るんですよ。買い手はいくらでもいます」と興奮気味に話していた。

翌日ドバイのホテルで彼と朝食をとりながら、「日本でもビジネスをやる気があれば手伝うよ」と話したが、一向に興味を示さなかった。あのころのドバイの湧き立つ好況の中では、日本は彼の眼中になかった。日本に興味を示さなかったのは当然と納得したのを覚

えている。

ドバイから日本に着いて自宅への帰り道、羽田空港からベイブリッジを渡りながら横浜の街を見渡した時に、私は「日本は死んでいる」と感じた。ドバイで見た24時間の高層ビル突貫工事の姿はどこにもなかった。ドバイのあの活気は、日本にはまったくなかった。

13-3. オマーン人留学生への支援 - 留学生係の看板が日本語

話を2005年2月、オマーンの3大学での講演が終わった時点に戻す。私は旧友に会うべく以前勤務していた商工省や関係機関であるOCIPEDを訪問した。訪問時に初めて会ったオマーン人の若い課長が自分の車で私をホテルまで送ってくれたが、車中で彼から「今年、妹が東大大学院に留学します」という話を聞いた。「オマーンのためにはできることは何でもやろう」と思っていた私は、たちどころに「そうなの、日本に来たら連絡して」と応じた。彼もアメリカへの大学への留学経験者、専門はITだと聞いた。2人は有力な部族の出身ではないが、奨学金を得てアメリカや日本で学ぶ優秀な兄妹であることには感心した。

これより先の1991年には、国王府が高校を卒業したばかりのオマーン人男性2名を日本の大東文化大学に留学させた。1992年にはうち1人をわが家に招いた。2人はその後拓殖大学と神奈川大学の大学院で修士号を取得したが、私は前者の修士論文作成の手伝いもした。また、商工省からの留学生として筑波大学で博士課程にいたオマーン人女子学生を東京に招いて、ホテルに泊めて東京見物をさせたこともあった。オマーン人留学生の世話は、それまでも経験があった。

2005年7月、オマーン人女子留学生が日本にやってきた。彼女の専門は魚の病気、研究室は本郷の東大農学部にあった。来日してから連絡があって、私は農学部の正門前で彼女に合流した。はるかオマーンから来日した彼女の姉とくだんの兄が一緒であった。そう裕福でもない家族であろうが、こういう時に家族が同行するというのがオマーンたるゆえんである。いやアラブ人たるゆえんであると言った方がよいかもかもしれない。とにかく、家族思いなのである。日本人の感覚では、過保護に思われることがあるかもしれないが、これが、文化の違いというものであろう。彼らは、日本人と比べると、家族間の絆がずっと強いのである。

まだ、入学手続きをしていないというので、まずは東大本郷キャンパスの留学生係を訪問した。そこは古い建物の一角で、小さく「留学生係」と書かれた看板がぶら下がっている窓口を見つけて声をかけると、奥から中年の女性職員が出てきた。この職員はまったく英語ができなかった。同大の大学院での授業はすべて英語で行われるため、ここで学ぶオマーン人女子学生は日本語の勉強をしていないので日本語ができない。ここは、私が通訳をして事なきを得た。大体、ぶらさがっている看板が日本語で「留学生係」、外国からの留学生がこれを読める訳がない。「日本人の付き添いのいない外国人学生はどうするのだろ

う。これが天下の東大か」とその時無性に腹が立った。開かれたエクセター大学とは似ても似つかない閉鎖性だったのである。親切さにも欠けていた。

無事に東大に入学ができた後、彼女は横浜にある私の家にもよく遊びにきた。よく食事もして帰ったが、日本の苺はまだしも、納豆がお気に入りの食べ物になったのには驚いた。納豆を好きなオマーン人は、私の知っている限り彼女だけである。日本の柔らかいパンも大好物。「帰国したら、マスカットで日本風のパン屋さんを開きたい」とも言っていた。

彼女は最初の1年間は東大駒場の留学生用の宿舎に住んだが、2年目からは学外に出なければならないという規則で、「どうしようか」という相談があった。

そこで、私は友人が方丈を務める中野にある名刹「多宝山成願寺」への住み込みを薦めた。寺の一角に家具や電気器具付きの学生寮があり、当時は中国や韓国の男子学生が数人住み込んでいた。彼らは朝6時から30分間敷地や本堂などの掃除をして1日に500円の報酬をもらえ、6時半から7時までさらに作業を続けると無料の朝食を摂ることができた。部屋代が2万円弱だったので、朝30分だけ働けば、住宅費・光熱費が無料ということになる。向学心のある若い人を応援したいという方丈の願いからの制度であった。

この寺は、曹洞宗の禅寺。イスラーム教徒が寺に泊まることができるのか、またアラブの女性が男性の学生の中で生活ができるのを気遣ったが、彼女はすんなりと寺での居住を受け入れた。

彼女の入寮に際しては、学生寮でも一番広い2間で、トイレ・台所付きの部屋が与えられた。私からの依頼で、家具もエアコンから洗濯機、掃除機など新調してもらえた。彼女は約1年間毎朝の掃除を務め、禅寺での生活は彼女の貴重な経験となった。

日本人には分からないだろうが、日本に滞在する外国人は時折警察官の職務質問を受ける。彼女も職務質問を何回か受けたという。その時に「東京大学の学生証を提示すると、『おお、東大の学生さん』と大いに敬意を表してくれて助かった!」と言う。日本の学閥志向はしっかりと警察にも根付いていると確認させられた。

13-4. さらなるテレビ番組への協力 - 乳香の紹介を中心として

2006年の1月に、NHKの吉田ディレクターから、「NHKは1982年から52本の『シルクロード・シリーズ』を放映して好評を得てきた。『シルクロード2007』シリーズを制作したい。その最初に「オマーンの乳香」を取り上げたい。そのコーディネーターを遠藤さんをお願いしたい」という電話が自宅にあった。

2002年5月25日に放映された同局の『地球に好奇心』というシリーズの中での「熱砂のラクダレースーオマーン・ベドウィン父子の挑戦」という作品に私が協力をしたことからの依頼であった。

「今度のシリーズでは、生産地オマーンのドファール地方、それからイエメンを経て、サウジアラビアに続く古代の乳香ルートを辿りたい」、「ドファールでは、11月に乳香の

採取状況、乳香の古代の集積地、乳香の取引シーン、乳香スーク、人々が日常生活や結婚式などで乳香を使用するシーン、乳香の積出港であったホールルーリー遺跡を撮影したい」、「撮影場所の選定を行うために吉田ディレクターがオマーンを訪問する。その時に随行をお願いしたい」、「現地での撮影の許可や現地のガイドの手配もお願いしたい」とのことであった。

オマーンのことならできることは何でも協力するという私は、もちろんこれを受諾した。

2006年2月4日に、私はドバイ経由で単身オマーンに飛び、オマーン情報省に旧知の英国人女性担当者を訪ねて撮影許可や現地旅行会社やガイド等の情報を得、さらに車や運転手等の提供等に全面的な協力を取り付け、その足で日本大使館への報告を済ませた。翌日には、これも情報省の英国人女性の紹介で、乳香を専門とするスルタン・カブース大学の助教授や文化担当の国王顧問事務所等を訪ねて必要な情報を入手した。

6日には、その朝マスカットに到着した吉田ディレクターと合流し、オマーン情報省や日本大使館へのあいさつをすませ、またマスカット市郊外にある高級香水「アムアージュ」の製造工場などを訪問し、夜にはドファール地方の首都でオマーン第二の都市でもあるサララに飛んだ。

7日には、情報省の車で役人と私的に手配したガイドとともにサララ市から北上、ハリフ・シーズン（雨季）のために緑一色になっていたカラ山脈を越えて、乳香の販売跡や貯蔵所跡のあるハヌーン、乳香樹の生えているワジ・ダウカを訪問し、それから立ち寄ったベドウィンの家で庭先に生える乳香樹で乳香採取の実演を見せてもらった。その日は、引き返してイエメン国境まで足を伸ばし、サララに帰ってからはオマーン最大の乳香市場であるハッフア・スークとシャビ・スークを見学した。

8日には、サララから東方10キロのタカにある情報省の出先機関に務める役人の家に立ち寄り、乳香などの香料が日常的に使われている様を見聞きし、それからホールルーリー考古遺跡（ユネスコの世界遺産に「乳香の土地」の一部として登録されている。往時、乳香交易に使われた港や乳香の貯蔵庫、要塞・神殿跡などがある。オマーン南部のサララの東方約36キロに位置する）を見学、さらに最高品質の乳香がとれるワジ・アンドル（Wadi Andur）に向かった。

乳香には4等級ある。一番品質がよいとされるのはホジャリ（Hojari）で油脂分が少なく香りが強い。次が、乾燥したネジュド（Nejed）の谷で採れるネジュディ（Nejedi）。その下が、ネジュドの谷間ではなく、より湿気のある山の上で採れるシャザリ（Shazali）と雨も降る沿岸部で採れる油脂分が多くて匂いの薄いシャビィ（Shabi）である。よい乳香が育つためには、水が少しだけ下にあることと暖かな気候であることが重要である。このホジャリが採れる土地がワジ・アンドルであった。

私たちがどうしても見ておきたい場所であった。そのため途中で、サララからのガイドに加えて、この地への道を熟知しているガイドを雇い入れた。それでも、行けども行けどもワジ・アンドルには着けなかった。吉田ディレクターが予定していたドバイ行きの飛

行機に乗り遅れる懸念から、われわれは途中で断念してサララに引き返した。残念なことであった。

興味深かったのは、ワジ・アンドルへの途中で見た古代の乳香の貯蔵所。踏むと崩れ落ちそうな岩だらけの道を3、40メートルほど登ったところにその貯蔵所があった。往時はラクダで乳香をそこまで運んだという。そこには丘の上に立つ監視所跡があり、前面の谷を越えた山の上と右手に見える小高い丘にも監視所跡が見えた。

乳香を盗賊から守るためにラクダで険しい丘の上の貯蔵所にわざわざ運び、かつ四方に監視所を設けていたことを目の当たりにして、往時は乳香が金と同じ価格であったといわれるほど貴重品であったことを実感した。

移動途中の車内では、役人から「サララの結婚式では、花嫁が花婿の家に行く際に行列が組まれる。行列は何人かの男性が先導し、その後ろに乳香を燃やしたマバハラ（Mabakra=香炉）を頭にかざした女性の一団が続き、その後ろに花嫁が続くこと、オマーンでの結婚シーズンが6-8月であること」などを聞いた。

また、ガイドからは、「自分の家でも父親の代まで乳香の採取をやっていた。部落でいまでも乳香採取を続けている家は、2、3軒に減ってしまった」、「自分はオマーン石油開発会社の油田の消防隊に19年勤めている」ことなどを聞いた。

さらに、車中では、乳香の採取時に歌う唄を3曲歌ってもらった。概略以下のような内容であった。「私は乳香の仕事をしていなかった。結果を得るために、この仕事をする。ついに、この仕事をした。人びとがみなやるように」、「今日はたくさんの乳香がとれた。喜び勇んでスークに売りに行った。ところが相場が大幅ダウン。着るものしか買えなかった。食べるものは買えなかった」、「彼は深い谷間に居る。乳香は高い山で採らねばならない。彼はそこに登るのが怖かった。彼は勇気を鼓舞して、乳香を手に入れた」。

夜は、またハッファーとシャビーのスークを訪問した。吉田ディレクターが「後事をすべて私に託して飛行場に行ったので、私1人での訪問であった。

9日には、単身でサララ博物館、乳香博物館や乳香に詳しいオマーンラジオのエディターの取材をした。乳香博物館では、館内に入ると館長までが出迎えてくれた。訊いてみると、当日が開館日初日。私が、オマーン人を含めても、もちろん日本人でも当館訪問者第一号となった。名誉あることであった。

その時、試みに「第一号の入館者には、何か記念品をもらえるか」と訊ねてみたが、「そのようなものはない」とのことだった。いかにもその当時のオマーンらしかった。

博物館の入口を入った突き当たりに、オマーンの8つの地方から収集した砂を各地方ごと敷き詰め、その上にガラスを張って作ったオマーン全土の模型が飾られていた。館長から、「これは、アリ・スネーディ・スポーツ大臣のアイデアで制作したものである」との説明があったが、これを実際に作ったのは、UAEにいた日本人が経営する会社であった。

この会社の経営者は、私が丸善石油に勤務していた時の臼井先輩である。先輩は、私も勤務したアブダビ興産のアブダビ支店長をしていた1980年代の中ごろに、UAEを構

成する7つの首長国の砂漠からさまざまな色の砂を収集し（砂漠には、赤、白、灰色、褐色などさまざまな色の砂がある）、これを7層のガラスの中に入れた砂の額を考案し作製した。アブダビ興産を退職後に砂の額を製造販売する会社を設立して、「砂の詩 (Melody of the Sands)」という商品名でドバイ空港や日本の銀座などで販売し、好評を得ていた。

また、博物館に展示されていたオマーン全土の模型の「アイデアを提供した」アリ大臣とは、私が商工省に勤務した時から旧知の間柄で、商工省次官から当時大臣に昇進していた人物。私がこの模型の制作への協力を大臣から依頼されてこの会社を紹介したので、感慨深いものがあった。

翌10日にはマスカットでオマーン情報省と打ち合わせや日本大使館への報告を終え、私のオマーン出張を終えた。

帰国後も、撮影の時期、撮影体制、情報省から得られる協力などについての報告書を出し、また、多くの要調査事項をまとめてコーディネーターとしての仕事を終えた。

その後NHKの撮影クルーが現地入りし、成果は「新シルクロード 激動の大地を行く 第2集 シバの女王の末裔たち」として2007年5月20日に総合テレビで放映された。

それから半年後の2007年11月上旬に、今度は、テレビ番組制作プロダクションである株式会社テレビマンユニオンの工藤プロデューサーから電話があった。「『世界ふしぎ発見』でオマーンを取り上げたい。協力を願いたい」ということであった。「世界ふしぎ発見」といえばだれもが知っている人気のテレビ番組、オマーンを日本の人々に知って貰いたいと強く願っている私にはまたとない話で、これもすぐに受諾した。

その月の下旬に当のプロデューサーが来宅し、オマーンの一般的な事情やオマーン情報省へのつなぎ方などを話した。その後もシナリオやクイズ作成に協力した。「世界ふしぎ発見」としても、その時が1987年以来20年ぶりのオマーン訪問になるということも聞いた。

翌年の3月下旬に工藤プロデューサー率いる撮影クルーがオマーンに飛んで、5月31日に「世界ふしぎ発見、オマーン」として放映された。

取り上げられたのは、かつて乳香の富で栄えた南部ドファール地方。紀元300年ごろ、乳香の交易路沿いにあって繁栄していた都市ウバールが消滅した。人々が富によって墮落したので神が怒って破壊したという伝説があった。1990年代になって米航空宇宙局(NASA)の協力で、人工衛星からの画像によって発見された。そのウバール遺跡やいまも乳香を大切にするオマーンの人々の暮らしなどが紹介され、そこから3問のクイズが出された。私があらかじめプロデューサーに提案しておいたクイズの一つが番組で取り上げられたのに満足した。

13-5. 学術交流への関わり - 日オの橋渡しに貢献

1993年に、著名な中東学者の小山茂樹が中東経済研究者一名を伴ってオマーンに来

た時に私がホルムズ海峡行きをアレンジしたことは既述した。1998年になって、この小山がオマーンの金融事情を調査したいというので、オマーン中央銀行頭取やスルタン・カブース大（SQU）の学者との面談をアレンジした。

1998年には、オマーンでフィールド調査をしたいと当時日本人女子大学院生の大川がオマーンにやってきた。私はSQUの事務総長と会い、彼女を同大に籍を置かせてもらうよう取り計らった。この時には、私のエクセター大学での人脈が役立った。まず、私は、エクセター大学で博士号を取りSQUで教えていたオマーン人の友人に相談した。彼から「それは大学の事務総長に依頼したらよい。同氏もエクセター大学で教育学修士を取得している。私が面談をアレンジしてやる。ところで、あのカリファを知っているだろう。彼はいま事務総長の秘書をしているよ」ということだった。

カリファはオマーンでも有力なシェイクの息子であり、エクセター大学で博士号を取得しているので、「Sheikh」と「Doctor」の称号を持っていた。彼がいるならなお頼みやすいと事務総長に会うと、「よいですよ」と承諾をしてくれ、彼女の大学での居場所や指導教官までも手配してくれた。

余談であるが、彼に「君は『Sheikh』と『Doctor』の称号を持っているが、どちらで呼んでもらいたいの？」と聞いたことがある。彼からは「それは『Doctor』です」との返事がたちどころに返ってきた。いまは、アラブ世界では「Doctor」の方が値打ちがあるのだろうかと思つた。それとも、彼には取得するのに費やした年月と注ぎ込んだエネルギーの賜物である「Doctor」の称号の方が思い入れがあるのだろうか。因みに、彼は名刺には「Sheikh」、「Doctor」と両方の称号を使っている。

大川はマスカットと地方の田舎で2年間のフィールドワークを終えたが、その滞在先も世話させてもらった。都会であるマスカットならまだしも、地方の田舎での滞在先を見つけるのには苦勞をした。最後には、友人の有力部族出身の大臣を「彼女はオマーン専門の学者の卵、一生オマーンと付き合うことになる。日オにとって懸け橋になる貴重な存在である。それを世話しないという選択はないだろう」と強引に、彼の出身の村で預かり先を見つけてもらった。

後から考えてみると、田舎の村のオマーン人の家庭で外国人の女性を預かるというのは、明治時代に日本の田舎の村で「アメリカ人女性を預かってもらう」というようなもので、極めて難しいことだったのかもしれない。友人には相当無理なことを頼んでしまったと思っている。

2000年6月に、SQUの教授になっていたエクセター大学で一緒だったムカッダム博士が日本の文部省の招待で日本にやってきた。同博士には日本政府から派遣された通訳がところどころ付いたが、知人の中東学者がいた東京外国語大学、知人のザンジバル女性研究者の富永教授が在籍していた仙台の宮城学院女子大学や知人の教授がいた大阪の民族博物館などは私が自費で同行した。仙台の女子大での講演会では私も演壇に立って話をした。

この縁で、2001年12月には宮城学院女子大学国際文化学科の女子学生38人が富永教授に引率されてオマーンを訪問した。学生たちは、観光、住まい、家族、世界遺産、香り、教育、音楽と舞踊、食研究の各グループに分かれてフィールドワークをし、スルタン・カブース大の学生との文化交流ワークショップを行った。

この訪問は、オマーンではちょっとした事件になった。これだけの数の若い日本人女性がオマーンを訪問したことはそれまでなかった。SQUでも男子学生は大いに関心を持ったと思われるが、この女子学生たちがマスカットの街に出没するや、これを見たオマーンの若者の車が一斉にクラクションを鳴らし、車は渋滞したいへんだったと仄聞した。

私は富永教授からの依頼でこの旅行実現のためのアドバイスをし、スルタン・カブース大との交渉の仲立ちをした。一行は、オマーンからザンジバルにも足を伸ばした。2003年3月には宮城学院女子大学でこの時の訪問に基づいた「オマーンとザンジバルの社会と文化」という写真展が開かれた。会場には、マスカットやニズワ、ワヒバ砂漠、マトラの魚スークやスルタン・カブース大でのワークショップなどの写真約100枚が飾られ、大勢の人が訪れた。

また、この式典には、駐日本ザンジバル大使と私が東京から招かれてテープカットをし、県庁を訪問して浅野宮城県知事に面会した。写真展会場で会ったオマーンを訪れた女子学生何人から、「私、オマーンの男の人と結婚してオマーンに住みたい」という話を聞いた。「短期間でこれほどオマーンが好きになってしまうんだ」と驚いた記憶がある。

2007年1月になって、国立民族博物館の西尾教授、兵庫県立大の名誉教授と東京外国語大学の助教授のオマーンでの学術調査に際して、案内役として同行した。期間は、1週間。目的は、アラビアンナイトに関わるオマーンの写本・フォークロア・伝統芸能の調査、オマーンを含めた湾岸諸国の日本に対するイメージの予備調査であった。1997年に西尾教授が研究者を引率してオマーンを訪れた時に、突然の連絡にも関わらず、必要な調査先などを私がアレンジしたことがあった。その縁での同行依頼であった。

マスカットでは、武器博物館、マトラスーク、マスカット・フェスティバルへ案内、文化遺産省局長の案内でいくつかの博物館や古文書館を訪問、スルタンカブース大での関係教授やオマーン作家協会会長との懇談、オマーン伝統音楽センターでの資料収集などを仲介した。また、古都ニズワやシンドバッドの出身地といわれるソハールにも足を伸ばした。

13-6. 日オ間のビジネス促進 - オマーンのために無償で働く

1998年に商工省を辞する時に、オマーンの知人から日オ間のビジネス促進をやらぬかと誘われたが、私は自分でビジネスをする気持ちはなかった。それでも、2000年4月にジャパン石油開発に依頼されてのオマーン石油開発機会の調査や、2002年には、中東協力センター（JCCME）がスポンサーのUNIDOの湾岸諸国向けの投資ミッション派遣プロジェクトのアドバイザーとしてオマーンを訪問したり、日オビジネス促進に

は関わった。

これより前、2001年のJCCMEが開始した「オマーン投資セミナー」では、オマーンについての講師も務めた。JCCMEのオマーン側のカウンターパートであるOCIPEDには、私が奉職したオマーン商工省の関連団体で商工省から移籍した同僚がいたこと、またオマーン人の総裁が私の古い友人であったことから、JCCMEとOCIPEDとの交流促進を手伝った。

UNIDOとも縁ができた私は、UNIDOの招聘事業でOCIPEDのオマーン人女性職員の来日時には、東京でのセミナーの出席や広島・新潟などへの視察旅行に同行した。広島では、宮島行の船着き場で、午後のお祈りをしたいというので、場所探しに困った記憶がある。また、すっかり日本の温泉が気に入り、行く先々で温泉を楽しんでいたが、若いムスリム女性、しかも人前で裸になる習慣がないのに「平気なの？」と聞いたら、「相手がみんな女性だから」という返事だった。

OCIPEDは長い間、在日代表を探していたが、後に日本オマーンクラブ会長を引き受けてもらった森谷和夫が商用で2003年7月に商用でヨルダンに行った時に、私が紹介してオマーンでOCIPEDに立ち寄ってもらい、その在日代表を引き受けてもらった。森谷は、主に薬の特許や薬品を中心とする貿易会社を経営していた。OCIPEDは当時、英国、ドイツ、フランスと米国に代表がいたが、日本には代表がいなかった。これで日オの投資促進貿易振興が図れると、OCIPEDや駐日オマーン大使にも喜んでもらった。

個別の日オ間のビジネスについても、多くの個人や会社から問い合わせや相談を受けた。家内からは「あなた、コンサルタント会社を開いたらいいんじゃない」と何回となく言われたが、オマーンへ恩返しをしたい一心で、自分の時間と金を注ぎ込んで、無償で相談に乗った。

主な参考文献：

「中東激変」(脇祐三、日本経済新聞社出版、2008年)